

韓国研修報告

麗水・順天反乱事件と李在明大統領の危険な歴史観

—「麗順10.19歴史館」訪問—

The Yeos-Suncheon Rebellion Incident and President Lee Jae Myung's
Dangerous View of History

久保田 るり子（産経新聞客員編集委員、國學院大學客員教授）
KUBOTA Ruriko

歴史認識問題研究会は2026年3月の韓国研修の一環で韓国南東部、全羅南道麗水市の「麗順10.19歴史館」を訪問した。韓国の歴代左派政権は、自国の歴史（近現代史）をいわゆる「進歩史観」（民族史観）に塗り替えるため、歴史的事件の歪曲・捏造を行ってきた。韓国左派は日本の韓国併合について、「圧政と収奪」一色に塗りつぶして「反日＝愛国」とする歴史歪曲を行ったが、自国史については日米と結託した保守政治勢力や軍部、財閥が国家暴力で市民を弾圧したとする「暗黒史」を捏造してきた。この「暗黒史」の代表となっているのが、建国前後の混乱期に起きた済州島事件と、これに連なる麗水・順天事件（麗順事件）である。朝鮮半島が南北に分断した1945年から建国の1948年の3年間は、米軍政下の南（韓国側）に共産勢力が浸透し、彼らによる不穏な騒擾が相次いだ混乱期であった。麗水・順天事件（以下、麗順事件）とは一体どんな事件であったのか。その真実がどう歪曲・捏造されたのか。「麗順10.19歴史館」視察は、その実態の現場を確認するために企画された。

■済州島事件

済州島事件は、韓国建国前夜の済州島を舞台に、共産主義勢力である南朝鮮労働党（南労党）が扇動しておこした騒擾事件である。暴徒は役所や学校、有力者や警察署を襲い、島を大混乱に陥れた。そしてこの事態を鎮静化するため、軍を派遣する過程で麗順事件は勃発した。二つの事件は同じ根から生じた。

火山島で貧しかった済州島は日本統治時代、多くの男性が日本に出稼ぎに出ていた。1945年、朝鮮半島が解放されると、日本から約15万人が帰島した。帰国者は島総人口の約半数を占めた。帰国者には日本で左翼思想に染まった共産主義者が少なからず入っていた。そのなかには済州島の南労党責任者、金達三や武力組織の責任者、李徳九らが出た。彼らは済州島で革命を夢みて、ゲリラ組織を作っていた。

38度線以北をソ連軍が、以南を米軍が軍政を敷く中、国連信託統治案が決裂した。南側では1948年5月、単独総選挙が行われることになったが、北側と左派はこれに猛反発した。済州島では、自主独立を訴えるデモのさなか、警察官が発砲し島民が死亡。これが引き金となって南労党の精鋭分子が蜂起したのが、済州島事件だった。

済州島では1947年春から、米軍の軍政側の警察隊と左派分子の小競り合いが絶えなかった。左派は「警察は島民の敵」として機会を窺っていた。1948年4月3日未明、南労

党済州島支部の指令を受けたゲリラ部隊は一斉に蜂起し、島の警察や保守系有力者と襲撃した。かれらは島に残されていた旧日本軍の武器、弾薬などで武装していた。騒乱は韓国本土から急派された警備隊（のちの韓国軍）との攻防戦となり、島民を巻き込んだ殺し合いになった。

1949年初夏、ゲリラ隊の責任者、李徳九が死亡したことで、南労党の組織的な抵抗は終わったが、残党勢力は漢拏山に逃げ込み、「当局は民衆の家を焼き逮捕する」などと言って住民を抱き込んで、警備隊の討伐戦は苦戦となった。韓国軍は1946年9月、ソウル第一連隊が創設されていたが、建国前はまだ「朝鮮警備隊」であった。正式な国軍となったのは、大韓民国建国（1948年8月15日）後の1948年9月である。事件はまさに、建国直前の混沌とした社会情勢のなかでおきた。

犠牲者は3万人に及んだ。この事件の悲劇は、騒乱に加わった左派分子の多くが島民であり、一方の親族らを殺された右派も島民であったことだった。島は真っ二つに割れて密告や殺戮が相次いだ。そして山に逃げ込んだゲリラ残党の掃討作戦が終わったのは1956年、事件から8年後である。のちに蜂起は「南労党済州島委員会」の独自判断による決起だったことが分かっている。また、事件後に南労党が追認していた。

南労党（南朝鮮労働党）とは、日本統治時代の非合法政党、朝鮮共産党などをルーツとして、韓国で1946年に結成された共産主義政党である。韓国建国後、李承晩政権の反共政策で弾圧され、党の主力メンバーは北朝鮮入りして朝鮮労働党と合併、朝鮮労働党となった。だが、金日成体制下の朝鮮戦争後、ほぼ全員が逮捕され、粛清された。

■麗水・順天事件

済州島事件の鎮圧化で起きた軍内の反乱が、麗水・順天事件（1948.10.19）である。南労党は各地方の国軍内に工作員を送っていた。1948年秋、済州島の情勢が悪化したため、李承晩政権は麗水の国軍第14連隊から一個大隊を増援することを決めた。

第14連隊は1948年5月に編成されたばかりの新部隊だった。その主体は光州の第4連隊で、左傾分子が多く潜入していた。しかも同隊の不満分子などの厄介者が第14連隊に押し込まれており、そのなかに南労党の精鋭分子が入っていた。そして麗水の北側、順天には第14連隊の2個中隊が分駐していた。

10月19日夜、鎮圧作戦の出動の直前、非常招集で集められた将兵に対し、曹長が突然、アジを飛ばした。「済州島の同胞に銃を向けるな」「南朝鮮を解放せよ」「警察が攻めてくる」。将兵は扇動に同調し、反乱軍となった。そして武器庫を押さえ、麗水市内に乱入、商店を焼き討ちし、警察官を襲い、中隊長ら軍上司を次々に射殺した。翌20日には順天の分駐部隊が反乱軍に合流し、蛮行を繰り返した。

ソウルの国軍総司令部は、この事態に驚愕した。麗水・順天だけではなかった。「南西部の部隊も反乱の雪崩を起こす可能性あり」と報告された。陸軍は、ソウルなど対北警戒以外の7個大隊を麗水鎮圧に充てることを決定した。国防部参謀総長ら韓国軍幹部は、米軍政部の幹部らとともに米軍機で光州に飛んだ。討伐作戦は東、西、北からの包囲・圧迫作戦で、反乱軍に押さえられた麗水を奪還、撃滅するというものだった。全軍指揮を金白一大佐が取り、臨時司令部の指揮を白善燁・総司令部作戦局長（のちの陸軍大将）が取った。

反乱軍を制圧した鎮圧部隊が麗水に入ったのは1948年10月26日。白善燁氏は「麗水は

まさに死の町であった。死体が山積みとなりすさまじい異臭を放ち、私はあれほどの惨状を、それまでも、それからも見ることがない」とのちに記している。反乱部隊の中枢部はゲリラとなって智異山に逃げ込んだ。残党ゲリラが一掃されたのは、済州島事件同様に1956年である。

済州島事件も麗順事件も韓国建国前後に起き、多大な犠牲を出した共産勢力による騒擾事件であった。その実態は数多くの証言、資料により裏付けがある。私自身も、済州島事件については李徳九の部下としてゲリラに加わった人物の親友から、当時の話を聞いている。また麗水奪還作戦を指揮した白善燁将軍は、軍の鎮圧作戦をその著書に記している。私はご本人から当時の心情を伺ったことがある。

しかし、こうした歴史的事実は韓国史から消されてしまった。多くの歴史的資料さえも「軍事国家の都合によるもの」と左派は一蹴し、公的文書も書き換えた。済州島事件は、島民たちが米軍政の手先となった警察や軍の犠牲になった「民主化の原点である」として扱われ、「国家暴力による民衆の犠牲」の象徴と位置づけられた。麗順事件もまた、「国家暴力による大規模な民間人虐殺事件」の悲劇として、韓国現代史の「正史」にされようとしている。驚くべき矮小化と歴史の改ざんである。しかし、そのことは韓国国内での歴史論争になっていない。韓国歴史学会が反日親北の左派史観に立っているためだ。韓国歴史学会は「慰安婦は性奴隷」との主張を繰り返してきた、反日史観の中核でもある。そして済州島事件、麗順事件の当事者たちのほとんどが鬼籍に入った現在は、この偏向した左派史観が一般化されつつある。

■左派政権の歴史改ざん

韓国の近現代史の最大の問題は、建国後の左派政権が主導して歴史的事実を改ざんし、左派史観に基づいて書き直した国史を「正史」として権威付け、関係者の名誉回復などの法的措置まで行ってきたという経緯にある。

左派史観（民族史観）の源流には次のような視点がある。「1948年に建国した大韓民国とは親日親米勢力によって生まれた正統性のない国家である」「この国の創成期、彼ら親日親米勢力は銃剣で民主化勢力を虐げ、搾取し、虐殺してきた」という理念だ。そして親日親米の首謀者は「李承晩、朴正熙である」としている。

左派の歴代政権、金大中、盧武鉉、文在寅、李在明政権は、済州島事件、麗順天事件を、「親日親米保守が起こした民主化勢力への軍事制圧で、多数の無辜の国民らが軍により虐殺された」との物語に書き換えた。

まず、済州島事件を「民主化運動」と位置付けたのは金大中政権で、国家として事件の再評価を「反乱・暴動」から「国家暴力による犠牲」という認識へと変えた。盧武鉉政権は「真相究明委員会」を作り、2000年に「済州4.3事件真相究明および犠牲者名誉回復に関する特別法」を制定、国家としての公式謝罪を行った（2003年）。盧政権は「済州4.3記念館」という博物館を建設した。文在寅政権は済州島事件を「国家暴力」「人権弾圧」だったと位置付けた「特別法」を制定、2022年から犠牲者らに補償金支払いを始めた。文政権は麗順天事件についても「麗水・順天真相究明および犠牲者名誉回復に関する特別法」（2021年）を制定、軍内の反乱はこの過程で「国家暴力による大規模な民間人虐殺」にすり替えられた。そして2023年、「麗水・順天10.19平和祈念館」（現在の「麗順10.19歴史館」）

を建設した。

李在明政権はこの文在寅路線を継承している。李在明政権は2025年10月19日、麗順事件77周年に当たり、記念式典で李大統領が「(反乱分子は)国民に銃口を向けろ」という不当な命令(を受けたことに)抗した」と述べた。上官らを殺害した反乱軍は、国家の不当な命令に抵抗した良心的な存在にすり替えられた。国家が公式に被害を認めたことにより、被害者は名誉回復が行われ、同時に公文書の記録が書き換えられている。

韓国の政治風土には、朝鮮半島の歴史的「出自」がしみ込んでいる。韓国は建国直後の朝鮮戦争(1950～53年)で国土が荒廃し、歴史学や学術分野の発展が遅れた。また、1960年～70年代に韓国に流入した歴史書は、日本の左派学者(朝鮮総連系)による研究書が大半であった。70年代末から80年代の民主化時代には、親北・反韓勢力による「民族史観」が広がった。建国から70年代まで、李承晩、朴正熙時代の「反日」とは「解放による愛国の反日」だったが、左派史観が入った80年代から現在までは「同盟より民族の反日」という衣をまとって、韓国のイデオロギー対立をあおってきた。

東西冷戦のさなか、一般の韓国人は80年代後半まで海外渡航が制限されていた。このため歴史研究者が日米に留学することが難しかった。この時代に「民主化時代」を迎えた韓国学界は、建国史を民族史観で塗りかえた。韓国のイデオロギー対立の根は1945～48年の混乱期にあるが、済州島事件、麗順事件はまさにその端緒だった。

■麗順10.19歴史館

今回の歴認研韓国視察では、「麗順10.19歴史観」の訪問で、国軍第14連隊の蜂起の経緯や派兵命令拒否のいきさつの説明文、命令書、写真などの展示物を視察した。構成は事件発生の経緯から民間人虐殺の実態まで、文政権下の「特別法」の真相究明委員会報告に従って「国家が公式に被害を認めた」というストーリーで作られており、「民間人の犠牲」「国家による不当な処刑」という形で構成されていた。

済州島事件に続いて行われた麗順事件の歴史改ざんは、左派政権の「過去史の清算」というジグソーパズルの絵図のピースなのである。韓国を民主主義国家として発展させてきた保守政権が「親米親日」の間違った政権であり、米韓同盟、日韓国交正常化は売国的であり、軍事政権は「暗国史」であった。この過去史を「清算」しなければならない、との絵図だ。

「過去史の清算」は「特別法」立法という手段で行われてきた。「真相究明」→「被害者の名誉回復と補償」→国家の謝罪→清算(歴史の改ざん)へと進み、公文書は書き換えられ、彼らの「正史」が教科書の記述となり、巧みな段階的歴史改ざんが行われてきた。

李承晩、朴正熙、全斗煥時代を独裁・権威軍国主義の「暗国史」として否定、左派政権を人道・平和主義として「正統性」を印象付ける。済州島事件に関しての歴史改ざんはすでに成功した。軍内の反乱だった麗順事件について「国家による不当な処刑」には国内から異論も出ており、まだ完全に左派史観が定着したわけではない。しかし、今回の視察で展示物を前にしつつ、「民主主義国家においても政治が虚構の『正史』を作っていく。これを真実の歴史に戻すのは途方もない作業だが、この偽りの歴史の先にある未来とは一体どんなものなのか」との感想を抱かざるを得なかった。